

俺は他人を傷つけるために生まれてきた
己の小っぼけな虚栄を咲かせるために生まれてきた
ああ、何とグロテスクな色香だ、吐き気がする
こんな花はハエを集めるぐらいがせいぜいよ
血溜まりに伸びた枯茎の先に咲く赤黒い痛みの花だ

俺は他人を傷つける度に自分も血をだらだらと流し
そして他人はけろりとしてびくともせずにいるのに
俺の方は、心臓に生えた鋭い枯茎の成長に
ますます苦痛に呻いて胸元を押さえ
切り取ってしまうこともできず
神経と動脈の通った堅い枯茎が伸びる様を
ただ絶望的に息を吐いて見つめるだけだ

ああ、長く伸びた茎ののどかに揺れる度
俺の中で肉がびりびりと裂け、骨がみしみしときしる
偽善の血がぬらぬらと流れ出す
悶え苦しみ、身をねじるほどに枯茎は笑い
俺の声は高く低く波打って、突然に
あたかもキャラコの布を引き裂く如き叫びとなる

その叫び、何であの無慈悲な植物に通じよう
この寄生はまさに一方的で、げに相互依存のかけらもない
ああもう駄目だ、堪えられない
ナイフだ、よく切れるナイフをくれ
それで喉頭を掻き切り、腹を滅茶苦茶にかき回してやる
そうとも、腹だ、あの堅い茎は俺には切れない
どうしたって切れない・・・

(1982.5.23)